

## 第2回教員研修会

(2012年3月5日受理)

新沼 敏哉\*      長澤 由喜子\*      井上 祥史\*      土井 宣夫\*  
 名古屋 恒彦\*      山本 奨\*      藤岡 宏章\*\*

### <第一部>

#### 4人のパネラーによる教育の側面から見た震災活動についての基調報告

司会：本日は県内各地からお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。予定の時刻となりましたので、会を進めていきたいと思えます。只今より、第二回教員研修会を始めます。最初に主催者を代表いたしまして、長澤教育学部長が、ご挨拶申し上げます。

長澤教育学部長：皆様こんにちは。寒い中お集まりいただきまして、ありがとうございます。先ほどはかなり雪が舞っていましたが、この時間に合わせたかのように晴れ間が出てきて、良い研修会になりそうな予感がしています。本当にお忙しい方ばかりがお集りですので、貴重な時間を割いてご出席いただいたことに感謝いたします。

そして、この研修会開催に当たりまして、今日シンポジウムのパネラーをお引き受け下さった4人の先生方にも感謝を申し上げたいと思えます。とりわけ、県教委の主任指導主事でいらっしゃいます藤岡先生には、いつもいろいろな形で学部にご協力いただいていますので、本当に恐縮しております。お忙しい中、お引き受け下さったことに改めて感謝申し上げます。そして、3人の学部の先生方は、3.11以来、継続してそれぞれの

ご専門を生かしながら、大学の震災本部とのつながりを持って、ご活躍でございます。大学教員の本分である研究の傍ら、そういった活動を続けていらっしゃることに、敬意を表したいと思います。

今日のテーマは、「震災と岩手の教育、この一年」ですけれども、今日のテーマについては、パネラーの一人である藤岡先生は岩手県災害対策本部の責任ある立場でいらっしゃいますので、この一年間の教育委員会の活動について、最も克明にご報告いただける方ではないかと思えます。また、これからの活動の方向についても、お話をしていただけるのではないかと思います。その意味で、一番適切な方をお招きできて、幸いに思っております。

本当はもっと学生たちに聞かせたいところなのですが、日程的に非常に厳しい状況にあります。特定の科を除いては、4年生は卒論を出したばかりですし、まだ卒論に取り組んでいる4年生もいます。さらに、ほとんどの1～3年生が来週試験を控えています。そういった状況から、学生にとっては日程的に厳しかったかなと思えます。ただ、いろいろな形でまた、今日の内容は学生たちにも伝えていきたいと思えます。学生たちの学ぶ意欲が低いのではないということは、ご理解いただきたいと思います。

皆さんにとって、今日の時間が充実した時間となり、震災から「もう1年」ではなく、

\* 岩手大学教育学部

\*\* 岩手県教育委員会

「まだ1年」という思いで、これからだという思いを強く感じていただくことができたと思います。「もう1年」というのは、岩手県教育委員会は大変頑張っていると外からも高く評価されていますので、県教委を含めないで、政府の対応が遅れているという意味において、「もう1年」と言いたい気持ちが私には少しあります。しかしながら、長期的なビジョンを岩手県は示していますので、その意味では、この理念を理解したうえで、「まだ1年」という思いを強くもっていただけたらと思います。

岩手大学として、被災地とともにどう歩んでいったらいいか、今日の研究会が、その一つの道しるべとなるような充実した時間となることを願っています。

今日をご出席いただきましてありがとうございます。

司会：それではさっそくですが、研修会を進めてまいりたいと思います。今回のテーマですが、只今学部長さんからお話があったように、震災と岩手の教育についてです。最初に4つの報告を4人の先生方にしてもらい、その後、報告をいただいた4人の先生方でシンポジウムをしてもらうというように進めてまいりたいと思います。途中、フロアの皆様にも参加していただきたいと思いますので、ご協力よろしくお願いいたします。それでは最初に本日のコーディネーターをご紹介いたします。岩手大学教育学部教授兼附属教育実践総合センター長でもあります井上先生でございます。

井上先生：よろしくお願いいたします。

司会：続きまして、4人のパネラーの先生方をご紹介します。

地域地震・津波調査と安全について報告していただきます岩手大学教育学部教授土井

先生でございます。土井先生は、岩手大学三陸復興推進本部の自然災害解析班長も務めております。続きまして岩手大学における震災ボランティアについて報告していただきます岩手大学教育学部教授名古屋先生でございます。名古屋先生も三陸復興推進本部のボランティア班長を務めております。次に岩手子どもの心のサポートについて報告していただきます岩手大学教育学部準教授山本先生でございます。山本先生は、震災直後から沿岸の子どもたちの心のケア、あるいはそれに関する教職員の指導も行っております。最後になりますが、岩手の災害教育について報告いただきます岩手県教育委員会学校教育室主任指導主事の藤岡先生でございます。藤岡先生は先ほどお話があったように、復興教育の推進に中心となって尽力されている先生でございます。

それでは、最初の報告を始めたいと思います。地震・津波調査と安全性について土井先生、よろしくお願いいたします。

土井先生：それでは地震・津波の現状についてご紹介させていただきます。私は、岩手大学三陸復興推進本部の自然災害解析班に在籍しております。今日はスライドをたくさん準備しすぎてしまい、いただいている時間が20分～25分ということなので、時間に不安を感じますが、はじめさせていただきます。

今回の地震・津波は一口で言いますと、これまで学校等で理解を深めてきたプレート、そのプレートの運動の極端な表現であったと思います。プレートは、移動し沈み込み、あるいは衝突し、あるいはすれ違って、というような動き方をしていると理解してきたのですが、日本列島ではプレートが、主に沈み込んでいくわけです。日本の東にある太平洋プレートが太平洋東部で生産され、日本列島に向かって移動してきて沈み込んでいくという理解だったんですね。沈み込むという言葉

簡単に使っていたのですが、しかしその理解はほんの一部分しか見ていなかったらしい。3.11は、「こうやってプレートは沈み込むんだ」と私たちに教えてくれたということだと思います。

太平洋プレートが沈み込むとき海溝型の地震が発生します。図の赤く示したのが浅い地震、青く示したのが深い地震です。日本列島は東から西に向かって深い地震があります。つまり赤から青の方向へプレートが沈み込むことに伴って、プレート境界で地震が起きているわけです。これがプレートが沈み込んでいると考える証拠です。ですから、プレートは普段から少しずつ沈み込んでいるのだと考えてきたわけです。ところが、どうもそうではなかったというわけです。ある時に一気に沈み込む、それがまさに3.11だったわけです。

模式的に描くとこうなります。太平洋プレートが西に沈んで、プレート境界部で海溝型の地震が発生する。海洋プレートの厚さは100キロメートルくらいありますので、沈み込むときに非常に無理がかかるわけです。つまり、100キロメートルもあるような厚い板が、折れ曲がって沈み込むわけですから、その折れ曲がるところでいろんなことが起こりうるわけです。しかも、地球は丸いので、広いプレートが移動してきて、地球内部に入るためには、どうしても単純に折り曲げられない、ある程度湾曲して折れ曲がるわけです。地球をピンポン玉にたとえますと、ピンポン球を指で押さえた時に湾曲して折れ曲がるのと同じわけですね。こうして面積を小さくするわけです。それと同じことが日本海溝でも発生していますので、かなり無理がかかりながらプレートが沈み込んでいるわけです。したがって、プレート自体も破壊されるわけです。今回太平洋沖で余震がかなりたくさんありました、大きい余震もできましたね。加えて、内陸側のいわゆる活断層と言われるものも一緒に動いています。こういった断層が動くこ

とで、地震が発生しているわけです。

これは日本海溝の海底地形図です。ここが日本海溝です。プレートは日本列島の方に沈みこんでいくわけです。したがって日本海溝が東に突き出すように湾曲しているわけです。けっして真っすぐではない。この沈み込みにおいて、日本列島も東に湾曲しているわけです。海底地形を見ていくと日本海溝西側の大陸斜面にも、湾曲して隆起している部分があることが見えてきまして、このような湾曲した地形が重要だという提案を去年したところです。プレートの沈み込みによって東北地方が折れ曲がって東に移動しているわけです。

そして、今回の地震ですが、これが震源（震央）です。ご存知の通り震源は、地震が起こり始めた場所です。地震は断層運動と考えますと、震源は断層が割れ（ずれ）はじめた場所です。決してこの点だけで地震が発生したわけではないのです。では、断層がどこまで広がっていたかという、余震分布からおおきく広がっているのがわかったわけなんです。太平洋沿岸の沖合いに沿って、あるいは日本海溝に平行に近い形で、こういうふうに断層が伸びたというわけなんです。

これに関係しまして、震度分布ですけれども、図の赤くあるいは紫になっているところが震度6弱以上の揺れに見まれたところです。太平洋沿岸に沿って、南北約400キロメートルの距離で震度6以上になってしまったわけです。震度6弱になりますともう自分で立っていれない状態です。転んでしまうあるいはしゃがんでしまうような状態です。そういう揺れが非常に広い範囲で発生したということです。

ここに地震の波形を示しました。太平洋の海岸に平行に近い地震計の波形を並べています。左から右に時間が進んでいて、東西方向の変位を示します。波形は、揺れはじめてしばらくして強くなり、その後また強く揺

れる形です。最初の大きいゆれは、仙台を中心とする南北の地域の地震計が記録しています。少し経ちまして、再びほぼ同じ範囲の地震計が強く揺れます。これが2回目の破壊です。そうしましたら、今度は南側の福島県から茨城県内の地震計が強く揺れます。これが3回目の破壊です。時間的に言いますと、約3分間です。約3分間地震が起こっていたのです。このように3回の大きい破壊があり、仙台市の東方沖で2回、そして茨城県沖で1回であったということが分かります。これが3.11の地震ということになります。

断層は震源側で2回大きく割れた後、南方に伸びていきました。北側は久慈あたりまで2回目の強いゆれが届いています。この割れ方が次の地殻変動と結びつき、さらに津波に結びついていったのです。つまり、3回の大きな割れと揺れ、それに伴う3回の大きい地殻変動、これによって発生した3つの大津波ということですね。そこを詳しくお伝えしたいと思います。

まず破壊の仕方ですが、大きな破壊の前の3月9日に最初の破壊（前震）が起こりました。これは本震の北東側の浅いところで発生したマグニチュード7.3の地震です。ここから破壊が本震の領域に入りまして、3月11日に本震の震源でいっきに割れ始めました。太平洋沖合いのこの範囲が余震域で、断層面が破壊された範囲というわけです。本震の後、岩手県沖と茨城県沖で大きく割れました。これは3月11日の15時台の余震です。これらは本震よりもやや深く、本震を挟んで南北両端で出たということです。これは何を意味するかというと、本震により中央部分が大きく割れたために、歪が断層の北と南の端にたまり、そのやや深いところが割れたということです。つまりプレートがさらにひろく沈み込んだということです。この後の余震は、日本海溝の東側です。プレートが沈み込むときに、折れ曲がって地球の内部に沈み込んでいくわ

けですが、100キロメートルの厚さがありますので、簡単に折り曲がれない、そこでどうなるかといいますと、太平洋から来たプレートは、一回上に膨らんで折れ曲がる。厚い板をぐっとやると、ここでどうしても割れたり折れ曲がらないで、盛り上がりを作り少し割れながら曲がっていく。この場所は、後ろに太平洋プレートの本体が控えています。そして日本海溝から西側が、今いっきに沈み込み始めているわけです。従いまして、日本海溝の部分で引っ張られまして、日本海溝の東側のプレートが割れてしまったんですね。こうして発生してたのが、マグニチュード7.7の余震です。さらに、4月7日仙台沖でマグニチュード7.2、深さ66キロメートルの余震が発生しました。今度はプレートの中が破壊されて発生した地震で、深いところで発生しています。これまでは、プレート境界で次々に破壊してきたのですが、ここではプレートの中が破壊されました。どうしてかということ、先の余震はプレートが引っ張られて破壊したものでした。ところが、今回は浅い部分が沈み込んできたために、深い方のプレートが押されてぎゅっと縮まって内部が割れたのです。これが4月7日の余震です。この地震は陸域に近いところで発生したため、内陸側が再び被災しました。岩手県で言いますと、奥州市、一関市辺りで住宅被害がだいぶ広がりました。その後どこで大きな余震が発生したかといいますと、プレートの中の引っ張りと圧縮の中間域で横にずれるタイプの断層が生じました。プレートの沈み込みに合わせてこういう形で余震が発生しました。

それでは本体の断層がどう動いたかといいますと、東に50メートル以上ずれたと解析されています。これを逆断層運動といいまして、日本列島側が太平洋側につき出すような動きとなりました。大きな水平変動が生じて、陸域で最大5.3メートル東に移動しています。そして、海底ですともっと激しく移動してい



まして、特に日本海溝寄りが大きく移動しています。垂直方向にも変動していて、陸域で最大1.2メートル沈降しています。大槌湾の例では、このように岸壁が沈水した状態になってしまいました。陸前高田市も同じです。これをまとめてみますと、今回の逆断層運動で水平移動をともなう激しい隆起と沈降が起き、沈降域が海岸部に到達したために、大きな被害が生じたということです。この大きな地殻変動は津波の原因にもなりました。どうしてこのような地殻変動が起こるかといいますと、普段沈み込もうとするプレートで押されて隆起したり、下方に引きずられて沈んでいた陸側のプレートが、断層運動とともに海側に移動してその先端部が隆起し、その後ろ側が沈降するのです。それは隆起した部分の後ろが引っ張られた状態になって沈降するわけです。この変動は今もずっと続いておりまして、当初沈降していた沿岸部の一部が隆起に転じ、山田町あたりは沈降を続けています。一方、内陸の西側は本震の時はあまり影響なかったのですが、今は奥羽山脈あたりが沈降し始めています。このように今も変動が続いておりまして、まだ3.11は終わっていません。プレートの沈み込みはどんどん深い方について、現在の沈み込みは山田沖の深いところ、仙台沖の深いところで地震を起こさないままゆっくり沈み込んでいるという状態です。ここがおもしろいところです。

次に津波です。海岸に設置されていた検潮所や津波計は破壊されて記録が残っていません。記録が残っているのはGPS波浪計です。これは沖合で早めに津波をとらえて、陸に伝えて避難に備えようと国土交通省が設置したものです。そのデータがこれです。地震発生から翌日の朝6時位までに、だいたい15波の津波が記録されています。この図は、地震発生から21時までの7回の津波の波形を示すもので、非常に良く津波の特性をとらえています。ただ、これは沖合での津波波形でして、

最大波高7メートル弱で、これが陸に近づいてきますと、だいたい2倍程度以上の波高になります。この波形には2つの特徴があります。ひとつは、波の形が第何波目かによって違うということです。第4波以降の類似した波の前に、第1波から第3波の非常に不規則な波があるということです。よく見てみますと、第1波から第3波には、第4波以降の波にもっと短い波長の波が組み合わさっていると思われます。つまり、ブロードな津波にするどい短波長な津波が重なっている状態なんです。津波の上に津波が重なっている波形です。なぜこうなったかという、すでにお話ししました通り、仙台沖で断層が2回大きく割れました。その時の1回目の割れは深かったためにブロードな大きな津波になりました。2回目の割れは幅狭い範囲が大きく変位しまして、鋭く大きい津波を発生させました。これらが重なって、津波第1波が非常に強烈な状態になりました。なぜかという、ブロードな波は、だいたい45分から50分位で1サイクルする波で、しかもある程度高いので内陸奥深くまで津波が入っていくのです。もう一つの波は、短波長で高いので、これが防潮堤とかをいっきに破壊した。その後、後続の津波が長時間続いていましたので、津波が奥までずっと入って行ったという形になりました。

これは宮古市の防潮堤を津波が越えるところの写真ですけれども、津波の特徴が非常によく表れていまして、防潮堤を津波がまるで生き物のように越えてます。どういうことかというと、海側の海面の水位はずいぶん低いんです。ところが防潮堤のところで水位はずいぶん高くなっているのです。これは津波の特徴のひとつで、高速で海水が流れてきますので、防潮堤で止められますとそこでぐっと水位を上げるわけです。運動エネルギーが位置エネルギーにかわって、防潮堤を越えるわけです。

これは、宮古市摂待の「津波石」です。直径が5.7メートルあります。津波で約400メートル内陸側に運び上げられています。高さも3.2メートル程あります。私の研究室の学生と一緒に調査に行った時の写真です。このように非常に強いエネルギーを持った津波が内陸に入ってきたということになります。

今回の津波災害では、少し触れておきたいことがあります。それは釜石市鵜住居町の事例です。鵜住居町の住民は、海岸に近いこの鵜住居防災センターに逃げ込んで、多数の方が亡くなりました。その一方、皆様ご存知の通り、この直ぐ近くにある鵜住居小学校と釜石東中学校にいた子どもと教師は、全員助かりました。自分で山に逃げたわけですね。市民と子供の行動の違いがここではっきりしたわけです。学校の人たちがどうして助かったのでしょうか？釜石東中学校の校舎は三階まで被災しているのにです。

この表は、石巻市立大川小学校の事例と釜石東中学校と鵜住居小学校の事例を比較したものです。後者は死亡者0に対して、ほぼ同じ時刻に津波が到達した石巻市立大川小学校は、多くの子ども・教師が亡くなっているという実態があるわけです。なぜこれだけの差が出たのか、これはまだ現在検証中とおもいますが、今考えるべき問題があります。それは、大川小学校自体が避難所に指定され、そこに住民が逃げ込んできている、さらに生徒・児童の親御さんが迎えに来ている。その対応で混乱しているわけなんですね。加えて教育委員会のほうも、避難先の指定をしておりませんし、避難の事態を想定していないので避難路も作っていないのです。ぎりぎりになって避難を始めたところ、危険な方向に逃げざるを得なくなってしまうと、むしろ向かっている方向から津波が来てこういう結果になったというわけです。このあたりの検証は進んでいると思いますけれども、私の意見を述べさせてもらいますと、この場所は明治以

降の津波では被災していません。したがって避難所に指定されたのですけれども、過去100年程度のデータしか津波においては使われていないのです。火山噴火でしたら1万年間位の噴火現象を明らかにした上で想定するのですが、津波ではなかなかそうはいきません。そのような状況下で、学校の立地に関する危険の認識がどうだったかということなんです。その結果が全部に表れている、ということが私の見方です。したがって、あらゆる学校の立地に関してよく考えなければならないということがあると思います。

最後に今後のことですけれども、太平洋プレートが仙台市沖で大きく沈みこみますと、歪を支えるのは北側の青森県沖と南側の千葉県沖になります。これらの場所は、次にずれる可能性のあるところです。ここで、先週（1月下旬）発表された平川論文について紹介したいと思います。北海道東海岸から三陸海岸までに残る津波堆積物の調査によると、過去に巨大な地震津波が発生した可能性がある地域として、今回の震源地、東北地方北部の日本海溝付近、それから北海道の東方沖の千島海溝付近があることがわかりつつあります。今、仙台市沖の太平洋プレートがいつきに沈み込んで、その両端側が歪を支えている状態になってしまいましたので、岩手に近い北側が次に動く可能性もあるということで、今後とも注意が必要だろうと考えられます。これで終わりにしたいと思います。

司会：土井先生、ありがとうございました。次に2つ目の報告でありますが、岩手大学におけるボランティア展開について、名古屋先生、お願いします。

名古屋先生：それでは、私のほうから岩手大学における震災ボランティアの展開について報告をさせていただきます。パワーポイントの操

作に大変不慣れでありますので、座って操作をさせていただきます。お手元の資料には、A 4 裏表の紙資料を用意しております。スライドは、その資料をスライド化させたものがありますので、それをご覧いただければいいかなと思います。

まず、岩手大学におけるボランティア活動は3つの層に分かれていると考えています。1つは、今日私のほうから報告いたします、大学の本部として活動していますボランティア活動です。それから、各学部あるいは各学部の研究室で行っているボランティア活動・復興支援活動があります。この学部におけるものに関しましては、例えば教育学部であれば、学校における学習支援ですね。それぞれの教員が、沿岸地域の学校に関係を持っておりますので、その中で生まれてきているものなどであります。工学部であれば、コンピュータに関する支援、それから農学部であれば、被災動物に関するボランティア活動を行うなど、各学部の専門性を生かした、あるいは各研究室ごとのボランティア活動が2つ目として挙げられます。それから3つ目は、学生・教職員が、個人的に行っているボランティア活動でございます。

今日報告するのは、大学が組織的に行っているボランティア活動ということになります。その中のごく一部ではありますが、一定の広がりを持っていることをお伝えし、我々の活動を紹介していきたいと思います。今日も活動日でありますし、学生たちも沿岸に行っております。明日も行く者もおります。現在進行形でありますので、その点についてご理解いただけたらなと思います。

資料の大きな1番ですけれども、まず震災が発生した日から、GWまでの期間を私たちは、緊急沿岸支援期間と命名しまして、集中的に活動を行いました。それについてまず報告していきたいと思います。スライドをご覧ください。大船渡市の支援です。活動期間

は、4月6日から7日、14日です。6、7、8という予定だったんですけれども、余震等の関係で14日となりました。活動内容はですね、大船渡小学校、中学校さんのご協力を得まして、学級、学校を始めるために、小学校の清掃、がれきの撤去、それから教室の掃除をしました。それから中学校が避難所に指定されていまして、避難所での炊き出し、あるいは物品支援などの活動を行いました。体育系のサークルを中心に、サークルの結束力を生かして行いました。参加学生人数は、138人というふうになっております。

続きまして2番目ですが、盛岡YMCA宮古ボランティアセンターと連携しての、岩手大学公認学生ボランティア団体「天気輪の柱」を中心とした宮古市内におけるボランティア活動です。これにつきましては、現在も進行中でございます。活動日は、4月13日、14日と始まりまして、18日以降は、岩手大学が事業を開始したのはGW明けでございますので、それまでの期間は、毎日大学のほうで借り上げバスを出して、学生を派遣しておりました。活動内容は、宮古市内の浸水家屋の片づけ、ヘドロ除去などです。初期におきましては、ニーズ調査なども行い、それが現在のボランティア活動につながっているという事例もございます。参加学生人数は、181人ということになります。その他、イベント的なものとしては、本活動と関連して、4月30日土曜日に、本学学生団体等による提案で、宮古市民の方々とのお花見を実施しました。このお花見につきましては、迷いもあったわけなのですが、行った結果、学生約55人、市民約70人が参加しました。大学側の音楽系サークル、マジック系サークルなどが来て、楽しい時間を過ごすことができたということです。この時期に楽しいイベントを行うことに迷いはあったのですが、昨年末、ボランティアに行きますと、町内会の方が、この話を出してくださって、あのお花見がとても良かったんだ

と、気持ちがすごく落ち込んでいた時だったんだけれども、頑張る気になれたんだよということを、我々に話してくれたんですね。すぐには結果がでないボランティアもあるんですけども、その一つでもあるのかなと思ったところがございます。それから、期間中はバス移動をしていましたのですが、活動中はバスは待機していました。それはもったいないということで、避難所と郊外のスーパーをつなぐお買い物バスとして提供したということも致しました。

このような活動は、3月の段階で、学生たちが何かをしたいということで、本学の学生支援課に相談してきまして、発足したものです。大学としては、3月中、学生が被災地に入ることは、禁止しておりました。それはやはり安全を確保するというので、その間「天気輪の柱」のメンバーは、市内の様々な復興活動の準備に取り組んで、そして4月にスタートということになったわけです。

続きまして、これも大学が公認している学生支援団体なのですが、「もりもり☆岩手」という団体がございます。この団体は、農学部が中心になって組織しているもので、農学部の教員が陸前高田に関係があったものですから、3月の段階で、支援要請がありまして、陸前高田における復興支援活動を開始しております。活動期間は、4月7日から、5月5日までが活動期間でして、陸前高田災害ボランティアセンターのボランティアの受付業務ということで、156人の参加がありました。これについても現在まで進行しております。ボランティアセンターが閉鎖された段階で終了するべきかと思うのですが、閉鎖されるという方向性がなかなかないので、学生たちもどんどん腕をあげて、このボランティアセンターの方々に近い業務をこなしているということになります。

4番ですが、男女共同参画推進室というのが、本学にはありますが、そこで母親支援

ということで、「ほかほかママサロン」を内陸で行いました。沿岸のお母さん方を支援するというもので、乳幼児の見守り、あるいはお店屋さんごっこの企画・運営などを学生たちが参加させていただいたということになります。こちらの参加人数は、31人ということになります。

そして、5番目ですが、宮古市の教職員ボランティアです。私たちボランティア班は、学生たちだけでなく、教職員も対象にしておりますので、教職員の対応としては、4月29日から5月31日まで、宮古市の金浜老人福祉センター内に設けられた避難所で、支援を行いました。われわれだけでは対応しきれないところがありましたので、岩手山青少年交流の家の職員と1週間交代で毎日実施いたしました。

次に、現在までの主な継続活動ということで、私どものほうでは、「天気輪の柱」「もりもり☆岩手」などを核として展開しています。

「天気輪の柱」で継続している活動は、盛岡YMCA宮古ボランティアセンターを拠点としまして、このセンターと連携し、毎週土曜日を原則に参加しております。ヘドロ除去から、イベント支援まで、現在は幅広い活動を展開しております。主な活動は、現在、イベント支援が多くなってきて、年末年始の餅つき、仮設住宅等での餅つき、それから商店街でのイベントのたこ焼きづくりと、いろんなことをやっておりまして、われわれも、たこ焼きづくりがとても上手になってきています。これについては、全国のニュース等でも紹介していただくことがありまして、成果を上げているかなというふうに考えています。ボランティアセンターのほうで企画していただいているものに参加していくという形をとっております。ヘドロ除去というものがあげられていますが、これについては、震災後10か月以上過ぎているという中で、まだ当時の



ままというものもあります。ごく最近まで、浸水家屋の片づけ、あるいは撤去をどう解体していくかを迷ってらっしゃった方がいらっしゃいまして、さまざまな判断があるわけですが、解体しないで残そうという方がいらっしゃいます。そのような方々が、現在も支援要請しているという状況でございます。残された建物の中に、まだ湿っているものがあるということをわれわれは、重く受け止めております。最近ではですね、被災地も非常に寒くなってきておりますので、室内にウレタンマットを敷いてあたたくするとか、そういった支援活動も加えてきております。それから、宮古での活動は、教職員の活動も認めておりまして、本学の職員、あるいは附属校の教員が参加してくれることも時にはあります。

続きまして、学生団体「もりもり☆岩手」による活動ですが、この団体は先ほど言いましたように、陸前高田のボランティアセンターでの活動が現在も継続しています。なかなか陸前高田の状況は、宮古市とは違う状況が続いておりますので、当然継続していくというような形になっております。

教職員による活動ですけれども、教職員の活動は、先ほどの宮古の話、それから釜石でも実施を致しました。現在ではですね、教職員は基本的に本務による復興をということにシフトしておりまして、この教職員単位でのボランティアの募集は終えています。実は、宮古市における復興活動、それから「もりもり☆岩手」のサポートなども、それぞれに教職員が入っておりますので、教職員も希望すればボランティア活動ができる体制は残しております。

それから、文部科学省事業における支援活動とも連携しています。文部科学省からの復興支援事業への協力要請がありまして、その中で可能な範囲で活動しています。例えば、職員研修、被災地で若い教員の研修を行って

います。それから、文部科学省の提案するイベント活動の支援も行っているところでもあります。

ボランティアの参加学生人数ですけれども、1月18日現在で、私どもの大学では、ボランティア登録をしてもらったり、ボランティア保険にも加入してもらったりするのですが、582人ということになります。派遣の人数は、963人ということなのですが、実際には、ボランティア活動をしている学生はこれよりも多く、10月段階で把握した時には、1000人をはるかに超えているということです。個人レベルでの学生ボランティアもありますので、かなりの人数の学生たちが被災地に入って活動しているということになります。

今後の展開ということになりますが、宮古、陸前高田を中心とした活動を継続していくということになります。岩手大学の強みは、細く長くだと思っております。これにこだわりたいということです。ボランティア派遣人数が2人とか、そういうときもあります。そのようなときでも、可能な限り実施していく、努力をしていく、やめないということです。ニーズは変化をしているんですけれども、無くなりません。それはこの10か月で私たちが体験していることです。その中でわれわれがやれることを続けていきたいなと思います。それから、学習支援班というのが、本部のほうにございまして、これは、沿岸で求められる学力保障としての学習支援ですね。ここに関しては、ボランティア班とは別に組織して対応しているのですが、必要に応じて、ボランティア班は先に活動していますので、サポートしていく形になるかと考えております。われわれの活動は、学習支援よりも、体を使うこと、あるいはイベント支援など、生活復興にかかわる部分を中心にしていますが、学習支援の部分も、現に私の所属している教育学部では実効性を上げている部分であ

ります。その部分を大学としても行うということでもあります。この学習支援班のウエイトは非常に大きくなってくると思いますが、そちらのほうもわれわれボランティア班のスタンスで協力していきたいと思っております。

スポーツを通した復興支援というのは、岩手大にはスポーツユニオンという団体がございまして、県内のスポーツ関係者をつなぐ要になっているものです。その団体も震災発生後、スポーツを通したさまざまなボランティア活動や復興支援活動をしておりまして、われわれボランティア班の中にも、スポーツユニオンに参加している教員がいて、連携しながらボランティア班の取り組みも考えております。それから、野田村への展開ということですが、野田村はボランティア班としては、手を付けていなかった県北部の活動ですが、野田村は、県北部では破壊が激しいところでして、私も目を疑うような光景を見たわけですが、そこで新たに復興活動を展開できないかと思えます。すでに大阪大学を中心にしたチームが活動していて、そことの連携をはかって、支援しています。こちらイベント等の活動があれば参加するというような形で、商工会さんなどとも協力して体制を作っているところでもあります。

最後、プリントにはないことなのですが、ボランティア活動をしていて思うことを述べて、まとめにしたいと思います。

まず、助けてあげるボランティアから、ともに活動するボランティアへということです。多くの学生たちが、困っている人を助けてあげたいという善意でボランティアに参加するんですが、それではだめなんだということを、必ずボランティアの説明会ではお話しします。実際に帰ってきた学生たちはこの言葉を使わなくなります。やはり、ともに活動し、生活し、支え合うという当然の日常行為の一つの表れがボランティア活動であり、異例な事態の中での活動でございしますが、原理

原則はそこにあるんだと言っております。被災地の方々のニーズにこたえる、その必要を満たす当然の営みをしているんだということは、ずっと伝えていきたいと思うところでもあります。

それから、学生一人一人の心の支援ということで、特に震災6か月以降の課題としてこれを取り上げています。被災地に行きますと、初期においては子どもたちもとても明るく、現地の方々も明るく過ごされているということに私たちは、驚きました。しかし、6か月を過ぎて、さまざまなことが安定してきている中で、被災地域の中での心の痛みを表面に出してくる方々が少なくなっております。子どもたちの笑顔やがんばりも、もう限界を超えてきているというわけなんです。そのような中で、学生たちが、生の状況に触れるということになるわけで、そこで2つの問題が生じます。学生たちがどう関わっていくのかということと、それから学生たち自身の心をどう守るかということです。非常にネガティブになっている方もいらっしゃいます。その方々と学生が触れ合うというときに、学生の心をサポートしていくということも課題になっていきます。ボランティア班の中には、大学の保健管理センターの臨床心理士も入っていますので、そのへんは、手厚くこれからやっていかなければいけない。時間がたてばたつほど、厳しいことが起こってくるということを、この問題では深刻に受け止めております。

それから、最後は震災の教材化の進行とそれへの懸念ということです。震災は、もう全国で教材化されています。私どもも文科省の生涯学習の支援で、東京とテレビをつないでの被災地との交流会に参加したことがあるんですけども、明らかに東京地域の子どもたちと、それから沿岸山田の子どもたちの意識は違います。そのような差を感じるんですね。震災を教材化するというのは特に、関東など、

他県の方々が交流を求めてくるとか、さまざまなことがあります。大事なことはあるのですが、それが現場の子どもたちや学校を疲れさせてしまっていることではないかということは、正直考えなければならぬところです。それから、岩手県の実地研修においても教材化しなければいけないことだと思いますが、その子供たちの心が、時間がたてば癒されることではないんだということを考えた時に、慎重に教材化していかなければならぬのではないかということは、現場でかかわっていてしばしば思うことであります。

以上で私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会：名古屋先生、ありがとうございました。続きまして、3つ目の報告でございますけれども、岩手子どもの心のサポートについてです。山本先生、よろしくお願いいたします。

山本先生：よろしくお願いいたします。山本獎です。このような会を開いていただくことは、私にとって、とてもよいことだと実感しています。同じ学内にいても他の領域の先生のお話をうかがう機会は意外と少ないものです。ここまでお二人の先生のお話をうかがい、土井先生のお話からは、納得することの安心感が得られました。発災当日、「信じられないほどの長い揺れに恐怖を感じた」という思いが、「3カ所で破断が起きたのなら長く揺れても当然だ」と思えるように変わったのです。

そして、名古屋先生のお話については、最近の私の問題意識と共通する部分が多くて驚きました。

さて、私からは、いわて子どもの心のサポートに参加しての思いをお話しさせていただきます。これは県教委が行う事業で、そのサポートチームに参加させていただいたのです。皆さんの中には、県の教育行政に頼らなくても直接現地に入ったらよいだろうと思

われる方もいらっしゃると思います。しかしこのような対人援助的な関わりで最も大切なことは、自分自身の心と身体の安全を図ることなのです。私は、県の教育行政に身を守ってもらいながら、活動を行ったこととなります。ここでは、主に、この事業のなかで、学校の先生方の研修会を開かせていただいたり、子どもたちと直接会ったり、いろんな議論があるところではあると思いますが子どものトラウマ反応を測ったりということについてのお話をさせていただきます。

話しは、大きく分けて3点になります。ひとつは、トラウマ反応とストレス反応の仕組みやその表れ方についてです。最初にお話します。2つ目は、サポートプログラムの実際についてです。3つ目は、子どもたちと直接会ったり先生方から様子をうかがうことで、あるいは、数字から見えることから岩手の子どもの今の様子についてお話をさせていただきます。こうと思っています。

まず、ストレスやトラウマについてです。子どものケアという言葉がありますが、私たちはその言葉を使わずに、サポートという言い方をしています。子どもたちをケアし治してあげるではありません。ストレスを上手に処理できるようサポートするのが私たちの役割です。それはストレスマネジメントができるよう支援することなのです。PTSDという言葉はとても有名になりました。そのSはストレスのことです。一般にPTSDは事が起きてから1か月経過した後に与えられる診断名で、同様の症状でもそれ以前ですと急性ストレス障害という言い方になります。やはりストレスなのです。怖いことがあったから子どもを守ってあげようではなく、ストレスがうまく処理できなかったのだと理解して、ストレスマネジメントの観点から関わってきたのです。

ストレスに対して、人間がどうやって対応していくのか、そのシステムについてここで

共通理解を図ることにしましょう。これがストレッサーです。ストレッサーが人間にぶつかってくる。例えば私にも今ストレッサーがぶつかってきています。人前で話すのが苦手な私が、こうしてマイクを持っているこの状況がストレッサーとして私にぶつかってきているのです。この部屋が寒いとか、暑いとかもストレッサーになるわけです。当然、震災もストレッサーでした。

そしてこういうストレッサーやストレスに耐えなければならない訳ではないのです。普通、ストレッサーを受けた時に、人間は直ぐに困るわけではないのです。人間は、何か工夫をするものです。例えば、私のように南の方で育った人間にとっては、岩手の寒さはものすごく辛い。それでも寒さがストレッサーとしてぶつかってきたときに、直ぐにストレスに押しつぶされるのではなく、何か工夫をするのです。この工夫のひとつに、気分を変えるという情動焦点型の処理があります。例えば、先ほど先生から、辛いことがあった時に花見をしますという話がありました。これが情動焦点型の処理なのです。「寒くなりましたねえ」と挨拶を交わしても温かくはなりません、ストレスは上手に処理されます。もうひとつの工夫が問題焦点型の処理です。例えば、寒いときにコートを1枚羽織るという工夫です。

そしてこのようなストレスの処理について、上手な人だけでなく下手な人もいますものです。その違いを生むもののひとつに、スキルの獲得があります。私のように岩手に来て間もないと、まだ水抜きの方法に戸惑ってしまう。これがスキル不足です。上手に水抜きができるだけで、ストレスを感じなくなるものなのです。もうひとつ、上手下手の差を生むものとしてソーシャルサポートを挙げることにしましょう。これは援助されているという実感を表す用語です。助けられているという実感を抱いていらっしゃる方はストレスに

強い。こんなとき、釜石の交差点のことを思い出してしまうのです。釜石駅前の交差点は、長いこと信号が回復しなくて、ここは大阪府警、ここは埼玉県警と担当の警察官の方が交通整理をして下さっていました。復興の中で、信号機が復旧すると、便利になって、本当はうれしいはずなのに、何か寂しい。援助されているという実感がもてなくて、元気が出ないのです。助けられているという実感が大切であることを示す一例です。

私たちは我が身に降りかかってきたストレッサーをこのように処理しているのです。つまり、気分を変えたり、問題を克服したり、その時にはスキルや周りの応援が役立ったり、というしくみです。しかし、今回の大震災では違いました。まず、ストレッサーが、非日常の大きさでありました。普段学校ではストレッサーを上手に刻んで提供しているのです。できる程度の宿題しか出さないとか、走れる距離しか運動会で走らせないなど、子どもたちの課題を大人がコントロールしているのです。一見コントロールできそうもない子どもたちのけんかも同様です。これだったら大丈夫かなというときは放っておくし、これはもうだめだろうというときは先生が介入してストレッサーを上手に刻んであげる。大人は子どものためにこのような作業をしているのです。しかし今回の場合には、子どもたちには扱えないほどの巨大なものであったのです。

2つ目として、気分を変えるという対処行動が制限されました。子どもたちは、震災直後、最良のサポート源である友だちに会うことができない状況でした。そして、遊ぼうとしてもグラウンドには自衛隊のテントがある。体育館は避難所になっている。学校再開後も複数の学校が同居していて、自由には施設がつかえない。このような具合で、気分を変えることが制限される。学校場面だけではありません。自宅に帰っても同じです。子ど



もが学校での出来事を話そうと思っても、お父さん、お母さんは、復興のためになかなか帰ってこない。土日も同様に子どもを連れ出して気分転換をさせることなど、できない状況でした。ですから、この気分を変えるという普通の対処法が機能しなかったのです。

そして目の前にある課題の解決も困難でした。大人にとっても何を解決したらいいかわからない中でした。子どもにとっても問題焦点型の対処行動はできなかったのです。ソーシャルサポート、つまり被援助感も感じ難い状況にありました。普段なら一人の子どもが困っていると先生もクラスメートは放っておかず、「どうしたの?」と聞いてあげたりする。ところが今、私たちも含めて、岩手県民全員が、「自分はマシ」と思っている。今ここで、「被災された方を私たちは・・・」などと話をしていますが、私たち自身も絶対に完全に被災者です。盛岡だってあれだけ揺れて、テレビが倒れ食器が割れ本棚が崩れた。スーパーに行っても食べるものがない。電気もガスも止まってガソリンもない。そんな状態をあれだけ耐えた私たちが、被災者でないわけがないですよね。しかしその私たちは「沿岸以外は被災地ではない」「マシ」と思う。この「マシ」という感覚が、助けられているという感覚、つまり被援助感というものを下げているのです。このようなことが、沿岸の中でも見られるのです。

ストレッサーが大き過ぎ、情動焦点型の処理もできない、問題焦点型の処理もだめ、スキルもない、援助されているという実感も得にくい。このような状況で、ストレッサーから対処行動までの流れが滞ると、ストレス反応が生じるのです。

ストレス反応は、からだと気持ちと行動、考え方に出るものです。眠れない、食欲がない。赤ちゃん返りをしてお母さんを困らせた例もありました。それまでは、「うるせー」などと言っていた中学生男子が、お母さんの

行くところ、どこにでも付いて歩く。阪神淡路大震災の時も保健室の利用が増えたと言えます。頭痛腹痛だけでなく不注意からケガが多くなったり乱暴になったりする。自分を責めるということもありました。私たちも同じです。3月中にまだ安全に沿岸に入れる条件がないのに「行って何かをしなければ」と思ったのも自責の念から生じた義務感です。私たちもストレス反応を出していたのです。自責の念が一段落すれば、他者を責めるということも生じるのです。

このようなストレス反応は一見悪いことのように見えますが、実はそうでもないらしいのです。ストレスマネジメントが上手くできているときは、落ち着いて判断し適切な行動ができるものです。しかし問題を解決できない、気分転換もできない、自分には処理できない脅威だと認識したとき、自我に代わって身を守るための反射がストレス反応だと見ることができます。例えば、あの夜、熟睡していたら身の安全は図れなかったのです。食料がない中で食欲が出てはいけなかったのです。緊張に緊張を重ねて警戒しなければならなかったのです。私たちは哺乳類ですから、自身で対処できないとなれば親に守ってもらうために赤ちゃんにも戻ります。人間ですから理屈が通ると安心できます。何かが悪かったんじゃないかと考えたとき、先ほどのように「このプレートが動いたから地震が起きたんですよ」と言われると腑に落ちる。腑に落ちない時に、誰かが悪くなければいけないのであれば、自分を責める気持ちが起きてくるのも不思議ではありません。実はどれも必要な反応だったわけなんです。

しかし、必要であった反応も、長期間になり生活に差し障りがあるようになると、それは不適切な反応だということになります。それがトラウマ反応なのです。怖いことを思い出すなど侵入的な再体験、眠れないとか張りつめた警戒心が続く過覚醒。回避、麻痺は少

し厄介です。問題を避けようとする、思い出さないようにするというものですが、それが将来不適切な大きさと不適切なタイミングで出てくることが大きな問題となります。このトラウマ反応を、震災から時間がたった今、見逃してはならないのです。しかしここで問題なのは、これらの反応が、周囲からは分かり難いということです。その子が、例えば、再体験をしていたとしても、先生方には本人が言わなかったら分からないのです。張りつめた緊張感も周りには分かりにくい。それから、不眠についても「あなた、夜、ちゃんと寝てる？」と問うても「夜は眠れます」と子どもは答えてしまう。入眠には問題がないからです。実は、早朝覚醒しているというケースも多い。「夜眠れる？」ではなく「睡眠時間は十分？」と聞いたら、「実は毎日3時前に起きちゃって」と答え、ようやく発見できるという具合です。周囲には分かりにくいのです。回避、麻痺などは本人にすら自覚がないのですから、周囲にとっては尚更です。

分かりにくいトラウマ反応を、どのように見逃さないようにするのが、今の問題なのです。そして、その解決策のひとつが心のサポート事業の取組なのです。

そこで、ここからはサポート事業についてお話します。まず、4月5月の頃はまず、学校の先生方にストレスのメカニズムと現れ方について説明する研修会を沿岸各地で開催しました。反応を理解するための概念を整理し、具体的な反応例を示すことで、支援を必要とする子どもを見逃さないようにしてもらったのです。特にからだに出るような反応を中心としながらチェックシートを用意し、リラクセーションの方法を実習形式で学んでいただく取組をしたのです。私たちはこれを急性期研修会と呼び、「心のサポート授業」を提案したのです。

次の段階として、9月に中期研修会をしました。ここでのテーマはトラウマ反応です。

トラウマ反応のメカニズムと現れ方、つまり周囲からは分かり難く、これを感じている子どもが孤立しないように注意することを伝えて行く研修会です。そして、支援を要する子どもたちを見逃さないため、「助けて」と先生に話せる機会を作るため、先生と児童生徒のコミュニケーションツールとしての、「心とからだの健康観察」を作成し紹介したのです。「心のサポート授業」の中でこのツールは使われ、県内の小中高等学校の児童生徒のほぼ全員、約14万人が回答したのです。

そして、年明け1月にはメモリアル反応と呼ばれる、特異な反応について説明し、日常の学校にどのように安全に戻していくのかについて解説する演習をまじえた研修会を行いました。卒業式を想像してみましょう。今年は例年とは違った注意が必要です。校長先生の式辞、来賓の方の祝辞、送辞、答辞の中で、何度も大震災の様子が描写されるかもしれません。その時、子どもたちの心には扱いきれないような記憶がよみがえる可能性があるのです。いままで、大震災や津波の話を平気で語っていたり、発表している、一見しっかりしていると思われるような子どもも例外ではありません。式の進行をあらかじめ子どもたちに説明し、心の準備をさせたり、式の進行には関与しない子どもの様子を観察し支援する担当者を準備するなどの手段を講ずれば、リスクを減らすことができるのです。あわせて、「心とからだの健康観察」の活用方法についても理解を深めていただきました。

学校の先生方には、子ども一人一人のトラウマ反応やストレス反応の様子が概観できるシートを返しています。これらを用いてストレス反応の項目から質問をはじめ、回答時と現在の変化など比較しながらどのように面接相談をすすめるのかについて解説しました。トラウマ反応のある可能性のある子どもは約10%。学級の中では4人くらいです。この4人の児童生徒にまず面接相談の時間を設けま

す。ここで担任の先生が上手く介入できれば問題はありますが、もし課題があるようであれば、カウンセラーにつないでいただくシステムです。状況によっては、ドクターにもつなげるのです。つまり先生方をお願いしているのは、トラウマ反応を解決することではなく、見逃さないで関わっていただき、心理職や医療につなげていただくことなのです。岩手の子どもたちの現状と課題は、スライドにあるとおりです。先生方にも研修会をとおしてこれについて解説をしているところですが、阪神淡路大震災の時も、3年、4年後が相談ニーズのピークになったことに留意することが大切だと考えます。また、今回の大震災の子どもたちへの影響を考えると、キャリアの問題として捉えることも忘れてはならないでしょう。今回、価値観や生き方が変わったのは大人だけではなく。キャリア、社会における役割、価値観の多くを子どもたちは揺さぶられたのです。これについてどのように育て直していくのかという課題です。これについては藤岡先生が深めてくれると思います。とりあえず、私の報告はここまでにしましょう。どうもありがとうございました。

司会：山本先生、ありがとうございました。それでは、最後の報告でございませうけれども、岩手の復興教育について、藤岡先生、よろしくお願いします。

藤岡先生：皆さんこんにちは。岩手県教育委員会学校教育室所属、藤岡と申します。どうぞよろしくお願いします。3人の先生方の後にお話をするというのは、いつにもまして、ストレスというか、緊張感を伴うものだなと今思っているところです。私の役目は、今3人の先生方からお話いただいたようなものの中にあって、県の教育委員会は、どのような取り組みをしていたのかということについて、今日ご出席してくださっている皆様にお伝え

していくことが、私の役目なのかなと思っています。20分程度のところ、本当にかいつまんでの説明となることを、お許しいただきながら、お時間を頂戴して、説明をさせていただきたいと思っております。

実は、最初のところで学部長さんからご紹介をいただいたのですが、大した仕事をしているわけではなくて、それぞれのスタッフが取り組んでいるような内容を、ある程度取りまとめたり、いろんなところに行って、それをご紹介したりというような仕事をさせていただいているだけのことなのですが、今日の資料も、義務教育担当の多田課長が、各地区で説明した資料をお借りし、そのまま使うのもなんだかなと思ったので、自分なりに打ち直した程度のものだったりとか、あとは、岩手復興教育について中心にお話をさせていただくことになるんですが、それは今の段階では、柏木という指導主事が中心となって進めているものです。そういうほかの方々からの資料を借りながら、説明させていただくことをお許しいただきたいと思います。

今出ているスライドについては、明治以降の震災被害の比較ということなんですが、今回の東日本大震災津波につきましては、国家予算の27%を被害額として挙げているということで、かなり大きなものだということがお分かりいただけるのではないかと思います。11月17日現在という形での資料がでているのですが、県の教育委員会としましては、外向けに出した資料のまとめというものになります。児童、生徒の死亡、行方不明、教職員の死亡、行方不明の数字が出ているわけなんです。幸いなことに、学校に来ている子供たちについては、守ることができたというところが、岩手県では大きな部分だったかなと思います。また、物的被害におきましては、50%ちょいくらいの学校が、多大な被害を受けているということが見てわかると思います。転出、転入に関わりましては、5月1日現在

と、9月1日現在の資料を載せているんですが、岩手県の特徴は、宮城、福島と比べましてどこが違うかというと、意外と県内に出ていないということが大きな特徴ではないかなというふうに思っております。それは、県の持っているこれまでの地域性などもあるのかなと思っておりますし、ただ福島さんだけは、ちょっと特殊な事情がございますので、一概に比べることはできないかなと思います。宮城県さんなんかの動きを見ても、子どもだけで動くということは、ほとんど岩手県の場合はございませんので、家族での動きが多いです。一時的な避難があっても、もう戻るというようなこともあったりして、他の県に比べれば、小さな動きだったのかなととらえているところです。

ここからが、県の教育委員会の取り組みという部分になるのですが、大きく3つの段階を踏んでまいりました。救済ということ、復旧ということ、そして復興という3つのステップを踏んでいままでできたかなというふうに思っております。さらに、その対象がどうなのかということ、子どもたち、そして先生方、あとは学校という組織体、さらには市町村教育委員会という組織体。こういうような4つの種類があったかなというふうに思っております。

県の教育委員会としましては、まず事務局職員を派遣するということを、速急に行いました。これは、どちらかというと救済的な部分で、子どもというよりも先生方をある程度守ってあげなければならない。学校が避難所になったということもありますので、その学校のサポートと先生方のサポートをいっしょに進めるということから、職員の派遣をするとともに、職員だけではとても足りませんので、市町村さんをお願いをして、市町村の先生方にもサポートに入ってもらいました。3月11日ということで、これから卒業式を迎え、春休みという日程でした。この新年

の準備をしなければならない状況を、うまく都合つけていただいて、かなりの先生方に入ってもらいました。その直接的な救済に関わる作業とともに、県の教育委員会としましては、学校再開に向けた取り組みについて考えております。事務局内組織の横断的メンバー、県の教育委員会は、5室・課で運営されているわけなのですが、5つのそれぞれの室とか課というものからメンバーを出して、プロジェクトチームを作りながら進めていくという体制を組みました。例えば、通常、英語など外国語教育を進めている指導主事が、1か月以上ランドセル担当をやるとか、そういうような状態で、自分の職務とは別に、震災対応としての取組を進めていくという体制を組んだところでございます。

最初にやったことは何かといいますと、学校再開にむけたガイドラインというものをまとめるということでした。3月31日を目標に、進めてまいりました。この内容はいったいどういうものかということ、例えば、指導要録がなくなった。それをどうしたらよいのか。または、教科書がない。それをどのように手当てしていくのか。先生方の住むところをどういうふうに確保していったらよいのか。教育委員会として、学校にどのようにかわりながら進めていけばよいのか。あとは、もう少し先の話になるとは思ったのですが、運動する場所がない中で、子どもたちの運動をどのように確保していくかということで、スポーツ健康課に、学校内におけるリレーションや放課後の生活については、生涯学習文化課に、先生方自身に関わることについては教職員課に、そして我々のところでは、具体的な学校の運営と教育課程の編成、子どもたちの授業関係、さらには生徒指導担当が心のサポートを中心というような役割で進めました。まずは、こういうことをおさえておけば、学校の先生方が、いちいち問い合わせをせずに、自分たちのところで、考えてご判断いただき



ながら進めていくことができるのではないかと  
いうことを思いつくままに、どんどんまと  
めていくという作業を進めてまいりました。  
このガイドラインの初版につきましては、学  
校にどんと出すわけにはいかなかったので、  
それぞれの教育委員会さんに提供させていただ  
いて、必要に応じて使っていただくという  
段階を踏みました。現在は、この第二版とい  
うものがカラー版で作られて、各学校に配布  
されております。

次のスライドは、先生方の居住環境の確保  
ということについてですが、これは非常に難  
しい問題だったなというふうに思っておりま  
す。本当に住む場所がない、そういう中で学  
校が動き始める。先生方はどうやって学校に  
関わり始めるのか。それを県の教育委員会と  
して、サポートできずにいるという歯がゆさ  
がかなりあったなと思っております。5月、  
6月に各地区の校長研修講座という研修に出  
向いたのですが、被害の大きかった地区では、  
校長先生を筆頭に5人くらいでひとつの部屋  
を借りて、生活をしながら学校に通っている  
とか、避難所となっている学校で寝泊まりし  
ているという話をたくさん伺いました。この  
ような状況は、9月の段階でもなかなか解消  
されず、そのような生活をしながら学校運営  
を進めている先生方もいるという状況でし  
た。そういう中で、本当に先生方には、一生  
懸命働いていただいたと思っています。

学校再開の状況なのですが、だいたい4月  
の末くらいをめどにしながら、すべての学校  
が再開しているという形になります。資料1  
と書いてあります、別冊の後ろのほう4枚目  
くらいから、学校再開の4月状況が載ってお  
ります。4月のあたりは、そういうような形  
で進んでいたということになりますし、6月  
6日の資料がその後についてくるのですが、  
その中でもまだまだ避難所がかなり残ってい  
るという状況が理解していただけるかと思  
います。県立高等学校、または特別支援学校に

おいても同じような状態です。

プロジェクトチームのほうは、今度は学校  
再開から学校復興への協力活動から復興活動  
へシフトしていくことになります。どうい  
うふうに進めていったらよいかという話にな  
ってくるのですけれども、県の教育委員会で市  
町村を通じて、学校さんへお話をしたのは、  
子どもたちの実情と、家庭環境または地域の  
状況に配慮しながら、過重な負担にならない  
ように進めていくことをお願いしていますと  
いうことです。授業時数の確保というところ  
に、先生方はとても懸命に取り組んでいただ  
いているのですが、例えば、今年1年間で無  
理であれば、2年間というスパンでお願いし  
たいと思っております。ただその時に考えな  
ければいけないのは、記録する、そして引き  
継ぐというお話をしたところです。つまり、  
本年度やれたこと、まだやれていないこと、  
それを次にどうつなげていくかという仕組み  
を、学校の中で作っていただくことが必要だ  
と思っております。空白のままで、大人にす  
ることはできないということです。しかし、  
大変申し訳ないのですが、ここだけは無理し  
てくださいとお願いしたのは、実は中学校三  
年生の部分です。義務教育が終了の段階にな  
りますので、そこについては学校として、少  
し無理をしていただく必要がある。それ以外  
のところは、少し長いスパンで考えていただ  
いてもよろしいのではないかと話をした  
ところですが、先生方っていうのは、やっぱ  
りまじめだなと思います。この秋冬に入って、  
かなり頑張って授業をこなしていただいた  
なと思います。ただ、見取りということをし  
っかりしていただきながら、もう一回振り返  
って、足りないところは遠慮せず、新しい学  
年になった段階で、また進めていくというこ  
とをやっていかねばならないのかなとい  
うふうに思っているところです。市町村の教  
育委員会の運営体制の強化ということも必要  
ですので、県の教育委員会としましては、こ

のような形で職員を派遣して、教育委員会体制の充実というところまで進めてきたところです。

心のケアにつきましては、先ほど山本先生からお話がありましたので、私のほうからは、資料の提供ということだけで、進めたいと思いますが、やはりこういうものについても、すぐにやらなければならないというもの、プログラム化して、ある程度見通しをもって進めていくものが必要なのだということが、今回のことで私は学んだところです。心のケアだけではなくて、すべて、今回の震災を振り返ると、すぐにやらなければいけないことと、見通しをどう持っていただくかのために、作らなければいけない仕事という2種類に大きく分かれるのかなというふうに思っているところです。

次に、岩手の復興教育の推進ということにお話を移していきたいのですが、基本的な考え方は、実は4月の段階で、教育長、教育委員長のほうから、まとめる必要があるのではないかという指示が出ておりまして、すべての学校で周知する機会というのは、それほど多いわけではございません。ただちょうど先ほど話しましたように、5月の末から、県内6か所で、小中学校の校長先生方に、一斉に説明する場がございますので、そこに間に合わせるような形で、考え方だけでも示せばということで、1か月くらいで案を取りまとめ、それで説明を進めていくというステップを踏んでいったということです。それにつきましては、またあとでお話をさせていただきます。さらに、教員の配置について教職員課を中心にすすめていくということが必要になります。阪神淡路のときにも、文部科学省さんに必要な教員の確保、つまり震災前の現状ではどうしようもない部分もございますので、そのへんについて要望したわけですが、岩手県でもそういった試算をし、国のほうに掛け合い、実際にサポートをいただくと

というような段階を踏み、学校さんに配置していくという流れで進めてまいりました。

それ以外のところでは、皆さんご存知の通り、岩手の学び基金というものの設置とか、あとは、大きいところでは、県として、復興委員会を設置したということになるかと思います。全県をあげて、復興に臨むのだということをしちんとまとめましょうという形を作り出したということです。8月の段階で、復興基本計画、そして実施計画というものが提案され、それに基づいて、教育委員会だけではなくて、すべての部署が動きだしているということになります。国への要望は、ずっと続いているわけなのですが、3月、4月だけを取り上げますと、スライドのような形で要望を出しているということです。

学校の状況につきましては、11月17日現在でも、このような状態になっております。仮設校舎の建設ということが、報道等で示されているところなのですが、この後出来上がるのが、釜石地区のあたりかなと思っているところです。ただ、仮設校舎を作らずに、本校舎建築に向けて動いているということもかなりございますので、子どもたちの学びの場の確保ということで、市町村はかなり悩みながらも前に進んでいるところです。ただやはり難しいと思うことは、街づくりと大きなかわりがあるということだと思います。街づくりの計画ははっきりしない中で、学校だけ立てるということは、なかなかできない。そのためには、住民の方々の考えも聞かなければいけない。スピード感が必要なのですが、どうしてもそこにいろんな問題点がある。そこをどうしていくのかということが、各地区では難しいところにあるのではないかなと思います。それを少しでも楽にできるのであればということで、県の教育委員会では、さまざまな形でサポートしますよといった声掛けをさせていただいているところであります。復興教育計画はこのようなもので、このホー

ムページ上にも載っております。教育に関しましては、その中でも大きく心のサポートと岩手復興教育が事業として取り上げられているということになります。

さて、岩手復興教育プログラムなのですが、実は、今月の13日に、岩手県の総合教育センターで、岩手県教育研究発表会というものが行われました。その中の特設部隊で、復興教育に関する時間が設けられ、多田教育課長のご説明と、柏木指導主事によるこのプログラムの説明というものがあって、初めて全県の先生方に、初版が示される形になっております。今日は、その前半部分だけを、お時間もございませんので、ご説明するわけですが、資料の1に、菅野教育長が、新聞に載せたものを1枚持ってきておりますが、一番下のところに、「ハードだけでは命守れぬ」という部分がございます。今回の震災で改めて分かったことは、施設、設備などといったハードだけでは、人の命は守れないということです。こういうようなことからすると、子どもたち自身がしっかり考え判断し、そして行動に動いていくと、それをどのように教育という場で、子どもたちに身につけさせていくのかということを考えていくことが、何よりも大事だろうと思います。それが岩手復興教育プログラムの原点にあると思っています。ねらっているところは、人づくりなわけですが、なぜ人づくりかという、今の小学生、中学生が間違いなく岩手とそれぞれの地区を担っていく人材だというわけです。その子供たちが今回、辛い大きな経験をしたことを、次にどのようにつないでいくのかというのは、教育が担うべき大きな責任であるというふうに思っております。そうなった時に、全県の先生方が、心のよりどころとなるような考え方を持つことは大事なことだと思っております。お持ちいただく考え方としてのプランを示しているわけですが、その具体的なことについては、それぞれのところで考えていただく

というスタンスで進めているものでございます。新聞の記事が次に載っていますが、結構わかりやすくまとめているのかと思います。

もう1枚めくっていただくと、朝日新聞の記事がありますが、本当は、本学岩手大学の学生さんのボランティアの記事でも持ってきたらよかったかと反省しているところなのですが、今日持ってきたのは、1月くらいにも岩手日報でも取り上げられたものなのですが、この子は盛岡の中学校、高校を出て、今東京大学にいる学生さんです。東京でもできることがあるのではないかと考えて、自ら支援の行動をおこされたという内容です。実際に被災地にも何回も入っています。自分の親戚が、宮古にいるということで、震災の後、すぐに秋田に飛んで、自分の親族の安否を確認しに宮古に入ったという行動力のある男の子です。彼と東京で会って、ちょっとつながりができたので、その後やり取りをしているのですが、実は、おととい、手紙とメールが入ってきました、岩手復興教育を卒業論文にし、ようと思っているのですが、どうでしょうかというものだったんですね。そのような気持ちを持っていただけることは、良いことだなあと思いました。

なんでこんな話をしたかといいますと、本学のボランティアに関わっている学生さんたちもそうなのですが、このような考え方を、気持ちを持てる子どもたちを、この復興教育を通して育てていきたいと思っているところです。直接的に津波の大きな被害を受けた子供たちが、将来を担うように進めていくということもあるのですけれども、それだけではなく、そういう地区を支えていく子どもたちもわれわれは育てていかなければならない。そういうような教育も考えていけるようなプログラムを何とか作っていけないかなと思っています。基本的な考え方は、このような形で4つの視点を持ちながら、教育内

容は進められていくだろうということです。自らのあり方を考えるということをしていかなきゃいけないでしょうし、自らの命を守る、他者を支えるために身につけなければいけないものということをしっかし学べるプログラムでなくてはならないと思います。

岩手県では、すべての小中学校において、岩手型という特別な言い方をしているのですが、コミュニティスクールの考え方で学校は進めていただいております。地域と一体になって、目標に向かって進めていくということなのですが、今回の震災においても、地域との結びつきは大変強く表れたかなというふうに思っております。その考え方というものをもう一度考え直し、そして新しいものに変えていくという考え方をしていかなければならないのではないかと思います。そういうようなものを、バックボーンに持ちながら、復興教育というものを進めていけたらなと思っています。具体的な部分もちょっとだけ載せておきました。

スライドはここまでなのですが、別紙としまして、今度、各現場の先生方にもお示しする復興教育プログラムの一部を持ってまいりました。本冊子についてという資料があると思いますが、目次はこのようなかたちで並んでおります。理論的なこと、それから実践的なこと、そして計画を進めていく段階でどう作っていけばよいかということというような3部構成になっております。この後に、授業で使える教材を来年度整理したいというふうに思っているところです。ただですね、実際に専門的な知識を持っている大学の先生に監修等を受けていないということになりますので、岩手県としましては、これを来年度、専門の先生方にご協力いただき、検討委員会を立ち上げ、もう一度しっかりクリーニングをかけるつもりです。25年には、ある程度確定版という形で、すべての学校さんに示していく。どうしてしっかりとした形になってから、

出さなかったかということ、学校さんでは、もう主体的に進めていただいているんです。今回の資料を見ても、4月段階で、いろんな形で具体的に動いていただいているんです。その点で進めていただいているものを、それは大事なことですよというふうに、県の教育委員会としても、応援してあげたいなというところが、強くあるのです。そういうようなことこそ、子どもたちに学ばせたいですよ、自信をもってやってください。先生がおやりになっていることを、もう少しほかの先生方とつないでください、学校として組織的に進めることも大事ですよという形に持っていきたい。現在の段階で、我々が情報提供いただいた具体的な例を示しながら、こういうものでもいいんだなと思っていただくような形で進めていければいいのかなと思っています。

ということで、急ぎで、走りながら考えているような状態でやっているわけなのですが、少しでも現場の先生方のお役に立てばいいのかなというふうに思いながら進めているところです。また、先ほど名古屋先生の方からお話があった通り、十分配慮しながら進めていかなければいけないというふうにも思っているところです。よって、各学校の実情に応じてお願いしている。今やれるものと今うちではできないというものがあるわけです。それを教育に携わるプロパーとして教員がしっかりと考え、把握し、そしてそれに基づいて学校としてどう動くのかというものを判断していただくということを今後しっかりと進めていかなければいけないなと思っています。ところです。

今日渡した資料には、心のケア、サポートについての資料についても載せております。山本先生の方でお説明いただいているところでございますので、後で何かありましたらご覧いただくということで、私からは情報提供とさせていただきますと思っています。さら



に、7月25日に岩手県では、学校防災・災害対応指針というものを、案という形でまとめております。これは、従来ありました危機管理マニュアルの改訂版を県としても進めていかなければいけないと思っているところです。その案というものを示したところですので、そういうものに基づいて各学校では、自分たちの持っている管理マニュアルというものを見直しながら防災というものをもう一度考えていく、ということになるのかなと、現在はそういうような状況で進めているということになります。

間もなく1年を迎え、学校では新しい年に向けての計画づくりというものを進めているところです。いわての復興教育というものを位置付けながら、今後の子どもたちの教育をどのように進めていくのか、4月からの新しいスタートとどう切っていくのか、無理のないような形で、どう進めていくのかということをしつかりとみんなで議論していくのが、今求められていると思っているところでございます。時間を延ばしてしまって申し訳ございません。この後の第二部のところで、何か関係するところがございましたら、補足させていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

司会：藤岡先生、ありがとうございました。ここで休憩をとります。

## ＜第二部＞

### パネルディスカッションによる岩手の教育の現状確認と今後の展望

司会：第二部のほうは、井上先生にお願いします。

井上先生：それでは、第二部ということで、パネルディスカッションをはじめさせていただきます

ます。スライドに表示してありますように、第一部の報告をもとに、この一年われわれが行ってきました支援や、調査について改めて確認しながら、どのような支援をつなぎ、われわれにできることは何か、そして、どんな社会をイメージしていくのかを、主に教育の視点から議論していきたいと思います。結論は、なかなか確定したものがでるとは限りませんが、教員や教職員を目指す学生の皆さんが、子どもたちのメッセージをつなげていけるような議論になればと思っております。会場の皆様からの質問なども受け付けますので、ぜひ積極的に質問や提案をお願いします。

それでははじめていきたいと思います。このパネルディスカッションの主な論点は、このようなことを考えております。時間が限られておりますので、最初に藤岡先生の提案を受けてですが、復興教育プログラムというのが、5月くらいに校長会で策定されて、そして来年度から、教材として検討するというお話でした。この復興教育プログラムというものの原点にありますのが、先生もお話になりましたが、私なりに捉えてみますと、非常に辛い経験でありながらも、素晴らしい活動、自主的な活動を子どもたちが行ってくれている、それをぜひとも教育に生かしたいというそういう心があると私は解釈しました。そういうことを保証していくのが、われわれ大人の社会、これからどういうふうに復興を考えていこうかというような大人が考える復興のイメージにもつながってくるのではないかなと思います。そのため、災害の特徴というものを再確認し、防災、復興についてもう一度、土井先生にお話を聞こうと思います。

土井先生の方は、震災後は現地に何度も足を運ばれ、浸水マップなどを作成されてまいりました。県の復興計画なんかで、どのように成果が生かされているのかなど、もしお話しただけのところがあれば、よろしく願います。

土井先生：3.11が発生した時、どのような事態が現地で起こったのか、どういう実態なのかということは、全くわかりませんでした。また地域ごとに分断されてしまって、何をすればよいのかということもわかりませんでした。実は私自身、大学の研究室で地震にあったのですが、自分にできることはなんなのかなと考えて、やはり津波の実態を早く明らかにしなければいけないだろうと考えました。そうした時期の3月11日の一週間後位から国土地理院が航空写真を公開しはじめましたので、それを使って、津波の実態を解明しようと津波浸水域図の作成を始めました。津波は内陸に入ってきますと、一番奥に駆け上がって止まります。その範囲を書いたものを浸水域図と呼んでいます。それはあくまで津波が入った範囲を示すわけで、そのマップだけでは津波の実態が読み取れないということがあります。津波がどのように挙動して被害を与えたか、その強さも含めたものを表せないかと考えまして、新しい基準を設けて図を作りました。例えば、今回の津波では住宅が完全に破壊されて、土台しか残っていない状態が海岸エリアに発生しました。これをきちんとマップにしてみますと、津波強度1の範囲を特定できるのです。また、破壊された家のがれきの集積の仕方から津波の流れの方向や、強さ、浸水深がわかることから、ガレキの集積範囲先端線を記入したマップを作ったわけです。工学部の先生、それから教育学部の理科の先生などにも協力いただいて、出来上がった都度、岩手県災害対策本部に持っていき役立ててもらいました。

井上先生：ありがとうございます。先ほど鶴住居の話がありましたけれども、そういう津波マップというのは、今度学校を再建するときの基礎になると、当然のことながら思います。しかも、岩手復興計画の中に、取り組まれるという、そういう動きにつながっていきま

す。ちょっと質問ですけれども、津波が来た時に、コンクリート性の建物というのが、安全だったかというか、そのあたりを、現地を見られて、どうだったかを教えていただきたいと思います。

土井先生：基本的には、コンクリートの建物は、形が残ったという事例のほうが多いかと思います。一部、宮城県の女川町のほうでは、ビルそのものが横倒しになったという事例が2棟ほどありますけれども、多くは形が残っています。しかしながら、窓から津波が入ってきますので、建物の中は完全に流された状態になったと思います。

井上先生：ありがとうございます。復興計画では、3種類ほどの防災計画があり、津波を避ける都市づくりの案が記されています。先ほどの藤岡先生の話でも、そういう街づくりが、決まらなと学校のほうも再建できなとおっしゃっていましたが、ですから、復興計画を作られた立場で、全体における注意点というものがありますでしょうか。

土井先生：その部分で、これからの津波はどういう想定をしていたらいいのかというところが、一番大きなポイントだと思います。つまり、立地上の問題です。立地の危険性を含めた問題です。この図は津波前の陸前高田市の津波ハザードマップの事例です。これは岩手県のシミュレーションによる津波想定です。明治三陸大津波、昭和三陸大津波の実績、それから連動型の想定宮城県大地震のシミュレーションに基づきまして、いちばん深い津波の事例をマップにしたものです。赤い部分が10メートル位の津波、そして内陸側に向かって次第に小さくなって、先端付近で若干かぶるということですね。これが防災対策の基準になりました。ところがなんです。この赤丸印の陸前高田高校、高田市役所、陸前高田病

院では3階から4階まで津波が入っているわけですが、想定上では津波の末端に近い場所ですが、実際はほぼ壊滅状態になっているわけです。つまり、今回の津波は、これまでの100年間位の実績をはるかに超えているのがわかるかと思います。したがって、今の井上先生のご質問の中の次の学校の立地を考えたときに、何を基準にしたらよいのかということですが、実は一番問題であるとは私は思っています。たかだか過去100年程度の実績を基準にしたら、こういう結果になるということが証明されましたので、もうちょっと長い期間の、たとえば3000年、4000年の中での津波の最大規模はどうだったかという理解も含めて考えたうえで、公共施設、特に学校をどういうふうに建てたらいいかというのを、本来議論しなければいけないというふうに思っています。ところが、先ほどご紹介させていただいた通り、津波研究の現状は4000年位前までの間で、巨大な津波がいつ頃あったかがわかるようになったレベルでして、今の街づくりに即生かせない状態なんですね。研究の遅れが、この位街づくりに影響するのか、という思いです。質問に対しての答えになっていないですけども、現状はそういう状態ということになります。

井上先生：ありがとうございました。もう一点、うかがってよろしいでしょうか。土井先生の報告の中で、火山については地図がありまして、赤い印があったんですが、火山の危険性とかそういうことは、噴火とかそういうことは、岩手県には4つくらいありますが、内陸のほうの備えという部分では、いかがでしょうか。

土井先生：この図は三陸沖地震と内陸の火山活動の関係について調べたもので、2000年に公表したものです。三陸沖地震の発生前後5年間に影をつけてこの間に何が起こったかを示し

ています。この図から三陸沖巨大地震があると、内陸の火山が活動しているという事実が確定できました。火山は秋田焼山、岩手山、秋田駒ヶ岳です。現在、秋田駒ヶ岳が熱活動を活発化させて、それが地表に現れています。この活動は、2003年の宮城県沖地震の33時間後から火山性の地震が始まり、現在の熱活動につながったものです。岩手山は1998年に噴火しそうになりましたけれども、これは三陸はるか沖地震の後にはじまった一連の活動だということになります。そのようなことで、今回の巨大地震の後、火山がどうなるかに注目しているところです。岩手山では2009～2010年に小さいマグマの貫入がございまして、3.11以降は火山性の地震が増えていることから、注目しているところです。

井上先生：ありがとうございます。会場のほうから、何かご質問はありますか。どうぞ。

質問者①：陸前高田市立の矢作小学校の教員です。一番感じましたのは、学校が避難所になっているんですけども、結局ライフラインということで、電気がなくなった時に、ストーブもだめだと、ほかにも水道が出ないと、国とか県の予算でですね、たとえば、防災無線を設置しなければ固定電話も携帯電話も使えない状況だったんですね。その予算措置はあるのかなのかということをお聞きしたいです。それに加えて、毛布とか、乾パンとか、水とかというものを、防災復興委計画の中に補助されているのかということですね。あと2点目では、心のサポートについてです。うちの学校では、避難している子どもが78名いますけれども、4名の子どもの親が、亡くなっています。金曜日にスクールカウンセラーの方が来たんですけども、全部と面接する時間がなかったんですよ。スクールカウンセラーの方は、陸前高田市の場合、小学校1名、中学校1名ですが、全然人数が足りな

いんですよ。先ほどの話でも、子どもたちのトラウマが、3、4年後にピークになるということがありましたけれども、そうなりますと、やはりスクールカウンセラーの常時配置を、復興支援の資金を使って、もっとスクールカウンセラーや、心理療法士を各学校に1名ずつ配置しなければ、見えない子どものトラウマをどうするかっていうことを、国や県の方々が考えていかなければいけないなというふうに思いました。あと、先ほどの新聞で、子どもたちを、親が来ても絶対に返さないということなんですけれども、うちの学校は海から5キロなんですよ。だけれども川が止められると、結局は行かれないというわけなんですよ。そうなってくると、やはりヘリポートみたいなものが必要なのではないかというふうに、すごく感じました。話すといっぱいあるんですけども、まず、その復興計画の中で、その各学校に、防災無線の設置をお願いしたいし、それから発電機とか、食料、それから毛布とかお水、あとストーブですけれども、ファンヒーターではなくて、反射式のストーブがやはり、1、2台じゃ足りませんね。やはり、10台くらいはないとですね、避難所としては機能しないなと、すごく感じました。だからもう少しですね、現場の先生方や、地域の方々の中に入ってですね、次の震災があっても大丈夫なように、防災を具体的にやっていかないと大変じゃないかということを感じましたので、その大きく2点お聞きしたいなと思います。

井上先生：復興計画の中には、学校が防災拠点というのはイメージされています。それで、防災拠点といいますか、備蓄をして、そして自家発電を備えて、防災の拠点になるような話はニュースでもあります。それも、予算措置が取られることと思います。2番目のケアについては、山本先生いかがですか。

山本先生：カウンセラーの配置については、ご指摘の通りだと思います。週に一度などの頻度で定期的に学校に入ることはとても重要なことだと考えています。そう考えるのは、一ヶ月二ヶ月と間が空いてしまったのでは、相談ニーズを持った子どもも、それを言い出せないからなのです。あるいは、不定期の訪問の下では、先生方も子どもをカウンセラーにつなげようとは思わないのです。いつも、そして定期的に学校に入り続けることが、要支援児童生徒を見逃さないポイントだと思います。

そしてもうひとつ大切なことがあります。学校をカウンセリングの場所とするときには、先生方との協力が欠かせません。それは、一般の不適応状態と同じです。例えばカウンセラーが子どもを預かってよい状態にして返しても、なかなか状態は安定しないのです。指導援助を継続くださるのは学校の先生なのです。先生から見えるその子どもの課題について、先生と相談しながらいっしょに関わり介入することが大切です。病院における治療モデルとは異なる学校における指導援助モデルの中で、関わるのが大切なのです。その意味でカウンセラーだけでなく、先生方と一緒にやっていくという視点で、プログラムを作っていくことがいいと思っています。

質問者②：岩手大学教育学部、我妻というものです。今のことに関連してですが、まず、スクールカウンセラーのことについては、予算がないわけではなくって、人がいないんですよ。スクールカウンセラーの担い手である臨床心理士の方というのは、東北新幹線沿いにお住みで、沿岸部にはほとんどいないわけです。なので、月一回行くのがやっとみたいな、しかも冬で凍結した路面で、運転どうのこうのという話になりますのでね。それが人材不足の理由であります。私の知っている範囲だと、その常住的にいる方では、宮古市に



一人いるんですけれども、某国立大学の大学院生なんですよ。実質戦力にならないですね。

あと2点目は、山本先生がおっしゃったように、すべての困難や問題をスクールカウンセラーが解決するのではなくて、学校の先生自体が、ある程度担うことが必要だと思います。さっき藤岡先生がお話しされましたように、阪神淡路大震災の時も、神戸市及び兵庫県教育委員会は、その先生を教育復興担当教員、平成16年から、心のケア担当教員として、しかるべき研修をして、そして、そういう子どものそういったケアや、復興教育の中心的な学校内の先生として活動していった事例があるんです。ぜひ、そういうことにも岩手県は学んでいったらいいのではないかなと思います。

井上先生：ありがとうございます。ほかになければ、次に進みたいと思います。話題を提示したいと思いますけれども、防災教育というのが重要になってくるのですが、釜石市教育委員会は、非常に詳細な防災教育プログラムを持っています、この前お聞きしたところでは、他の市町村でも同様なプログラムを持つところが多いということでした。ということで、過去に防災教育で成果を上げてこれ、今後どのように、活用していくか、そのあたりについて、藤岡先生、よろしくお願いします。

藤岡先生：各市町村に、私と同じような指導主事が配置されているわけですが、その指導主事と情報を交換している段階で見えてきたのは、今井上先生からお話があったように、各市町村で、各地区の防災教育についての取り組みは十分に進められているということです。特に、沿岸部については、今までの津波の経験がございますので、やっていないところはほとんどないというくらいにやられてい

ると思います。今どういう状態なのかというと、自分たちが今まで持っていたものが、果たしてどうなったのかということの見直しが進められている感じしているところです。実は、山田町は、先ほど地震の専門的なお話があった段階で、11日より少し前に大きい地震がありましたよね。あのときに、校長先生方を全部集めるような形をとって、どういう動きを学校はとったのかということ、教育委員会は検証しているんですよ。その検証したもので、新たな指示を出したけれども、それが周知される前に11日が来たというところがあるので、実は、その前の地震の時に学校がうまく動かなかったことがあったみたいで、その指導主事の話だとスムーズにいなかった部分があったんです。それを直して、教育委員会として指示を出したんだけど、それが理解できたところは、スムーズにいったと思われる。それ以外のところでは、トラブルがありながらもなんとか乗り越えたのではというお話がございます。そういうことで、たぶんそれぞれ持っているものが、これでいいものということじゃなくて、今回のことを振り返りながら、じゃあ、何が足りなかったのかということに着手しているのではないかなと思っていますところでございます。

防災教育の中で、子どもたちにとって一番身近なものは何かといいますと、避難訓練ということになると思うのですが、その避難訓練の見直しというものは、かなり進んでいるようです。今までの避難訓練というのは、教師がプログラムをして、じゃあ避難訓練やりますよということで、避難訓練をやって、さあ、どうだったかということで終わりというものでした。しかし、多くの学校さんで今取り組まれていますのは、事前の指導があって、それはたぶん心の問題とか、いろいろなことがあるからだと思います。そして、事があって、その後どうだったかということ子ども目線でしっかりと振り返らせる。そう

いう中で、出てきている言葉で印象的だったのは、「先生、この避難路は、お年寄りと一緒にには逃げられないよね」と言った子どもがいたという話です。つまり、体験を通しながら、子どもたち自身も見つめなおしているわけですね。それと同じように、市町村教育委員会が持っている教育プログラムというものも、たぶんしっかりと見つめなおすという段階に今入ってきているのではないかなと思います。さらに、市町村さんが持っているプログラムというものを、しっかりとした専門的な知識の方にも見ていただいて、本当にこれがどうなのかということに、ステップアップしていくということも、私は大事なんじゃないかなと思うところです。そういうところで、大学さんとの連携とか、専門機関との連携ということが、市町村ではかなり進んでくるとは思っているかなと思っています。また、そういうような形が良いのではないかなということ、われわれ県としても、発信しながら、支えていくということも必要なんじゃないかなと思っています。

井上先生：ありがとうございます。2008年だったか、県立大の先生が、防災教育についての意識の低さや、かける時間の少なさについて講演しました。そういうことがないように、他の教科と関連付けながら、あるいは、避難訓練をやるにしても、なぜやるのかについての理解も含めた指導のできる防災教育であればと思っています。防災教育、その他何かご質問はありますか。

では、話題が飛びますけれども、ボランティアについて、名古屋先生からお話いただきました。非常に重要な指摘があったわけですが、学生のことを考えて対応され、そして今の子どもたちは、強い反応を示しているということでした。名古屋先生の方は、色々大学生のほうに事前指導をされてきました。その事前指導とは、どういう事前指導を

行って、何を目標に、そして学生がどのような指導を受けてきたか。そのあたりをかいつまんでお話しいただけたらと思います。

名古屋先生：私どものボランティア活動では、必ず事前指導を受けることを、義務付けております。毎月、第一月曜日の昼休みですが、やっております。

そこで私が重んじていることは、2つありまして、ひとつは先ほど申し上げた、やってあげる的なボランティアではないということです。善意であることが正しいことだけではないんだということは伝えております。

それからもう一つは、安全に帰ってきてくださいということです。それは、体の安全もそうですけれども、心の安全も含めてです。

その2つに絞り込んで話をしております。あわせて、ボランティアが終わりましたときに、必ず振り返り会というものをやるようにしています。これは、帰りのバスの中、洗いざらい、思ったことを吐き出そうというものです。これをやらないことには、さまざまな気持ちを抱え込んでしまう。教職員も、学生のみんなも、はき出すと言ったところです。

学生たちが何を得たかということは、振り返り会の中で、さまざまに耳にすることができます。きちんと整えて、こういうことがあるということ、言える段階ではないというふうに思いますが、一つ言えることは、学生たちが一人一人のスタンスで、現場を受け止めているということです。

もう一つは、地域の方々と触れ合う中で、自らの心を養っているなと思います。その養い方については、人の優しさや、暖かさを学んでくるということは、もちろんあります。それと同時に、自分たち自身を見つめて、自分たちが無力なんじゃないかということ、率直に告白する学生もいます。そこで、答えを出す必要はなく、というより、答えは出せないということです。われわれ自身も葛藤し

ながらやっております。そのようなことを、学生自身が心の中で感じ取ってくれていると思っております。ひとつ例を挙げますと、茶髪で、華やかな学生たちがですね、帰りのバスで、かつて黒いヘドロの波に飲まれた地域を見た時に、真剣な表情に変わったのを私は見たことがあります。これは、もう言葉はでないんだということを感じていたと思います。私たちも同じく感じていました。それらがどのように、彼等、彼女等の中で、または教職員の中で、位置づけられていくのかは、もう少し時間をいただきたいというふうに思っております。

井上先生：ありがとうございます。陸前高田あたりでは、コーディネーターまでできる学生が育っているということは、非常にうれしい報告でした。一方で、子どものほうに目を向けますと、子どもの自主的なボランティア、そういうものが、復興教育プログラムでも原点の一つとなっているように、感じております。そういうことを、実際に見かけたり、子どもたちが実際に成長したなど観察されたりした例はございますか。

名古屋先生：私たちは、単独でボランティアをしているわけではないので、地元の方々と一緒にすることは、少なくありません。大船渡中学校の生徒さんたちと、炊き出しなんかをしたこともありますね。そこでは、皆さん明るく、前向きに活動している姿を見ました。それが今の生徒さんたちの姿の一つなんだろうなと思いました。残念ながら、私は第三者的に成長をみとるという観点をまだ持ち得ていませんので、今を生きているんだなということを、感じるだけです。その中で、先ほど申し上げた明るさや、活発さに会うこともあります。私も教師ですので、中には、子どもたちは自分の中に、溜めなくてもいいものを溜めているんだなと感じるところが現状

です。

もう一つ言いますと、小学生たち、中学生たち、高校生たちと活動を共にすることがありますが、現地のみんなは、復興活動から逃れにくいところにあると思うんですね。その中で、自分たちの役割をきちんと覚えながら、前向きに取り組んでいる姿を感じます。そのことを支えていかなければいけないんだなと感じます。教育的な効果がどうだこうだではなく、彼らにとっては、生活現実なんですね。そのことについて、われわれは重く受け止めていかなければならないかなと思います。

井上先生：ありがとうございます。何かボランティア活動について、何か質問はございますか。

質問者③：小学校の教員をしている工藤と申します。小学校の現場のことではなくて、息子が高専に行っているの、学園祭に行った時に、ボランティア活動とかっていうのは、どうなっているのかなと思って、知り合いの教員に聞きました。聞いた相手が、実家が陸前高田だということもあって、身内をなくしていて、学園祭でも全然楽しそうじゃなくて、本当は学生を連れて、いろんな体験をさせたいと学校にも頼んだんですけども、危険だからということで、学校からは断られました。バスを出してまで、学生を連れていけないと、言われたということでした。現状を見せたいんだよな、手伝わせたいんだよなと言っていました。話を聞いて、なんて言ったらいいか、わからなかったんですけども、親としては、連れて行ってどんどん体験させてほしい。自分の息子にもそういう体験をさせたかったと思いました。だから、保護者会とか、学校での活動に、参加して、声を出していればよかったなと、大学祭の時に初めて思いました。それは、私の振り返りなんです。先生には、大学だけじゃなく、教育機関の学生を持つ、学校は県内にいっぱいあるんです

けれども、岩手大学では、こういうふうなことをやっているんですけれども、他のところとの横の連携、そういった学生ボランティアを養うというか、そのようなことについては、何か岩手大学は行っていますか。

名古屋先生：県内の大学はですね、それぞれにボランティアを始めまして、スタートの仕方もさまざまなのですが、現在はですね、いわて高等教育コンソーシアムという大学間の連携がありまして、そこでも、ボランティアを担当する機関を立ち上げております。県立大学が、ボランティアに関しまして先行してまして、非常に広範囲で、活躍しているんですけれども、そのノウハウを生かしながら、またわれわれの担当している、宮古、あるいは釜石の一部なども、活動の場所としながら、他大学の学生たちも一緒に活動するということを始めています。実際に、われわれも12月の後半にですね、コンソーシアムの活動の一環として参加し、ボランティア活動をしてきました。われわれの一番のモットーとしましては、それぞれの大学がはじめていることは、大事にしていこうと思います。それを一本化するということではなく、ただ、同じ県内にある大学ですので、みんなで一緒にやっぺいこうということは、大事にしていこうということです。

井上先生：ありがとうございます。今時計を見たら、残りが少ないので、先に生かしていただきます。心のケアではなくて、心のサポートということで、ちょっと山本先生にお伺いします。私のように予備知識がないものにとっては、心のサポート活動と、医療活動というのは、どういう線引きをしているのか。また、われわれにもサポート、あるいはボランティアとして活動することができるか。そのあたりを教えていただければと思います。

山本先生：まず、ケアではないというところがポイントだと思います。活動当初は、「心のケア」という名前が与えられていました。しかし、ケアという考え方ですと、いつまで、だれが、責任をもって関わり続けるのかというところを想定していかなければなりません。ケアの主人公は、ケアする側にあると思うのです。しかし、サポートの主体はサポートされる側にあると思います。今回は、通常の事件・事故とは異なります。小中高校生の14万人の子たちにどのように関わるのかという課題を与えられてしまったのです。その時に、私たちは、衝撃を受けた子どもたちも基本的には、自分自身の自然治癒力を活用して元気になるのだと考えたのです。そしてこれがストレス障害のモデル本来の形でもあります。ただ、先ほども話したように、衝撃が大きかったり、他のシステムを使えなかったりするので、自分の力だけでは上手く立ち直れない場合もあるのだと理解しています。その立ち直りのお手伝いをすると言う意味でサポートという言葉で入りました。

その意味では、学校の中でサポートするときの一番の資源はなんと言っても先生なのです。考えてみれば、学校の先生は子どもたちのストレスマネジメントを毎日やってらっしゃるんですよね。例えば、テストの点が悪かったとか、友だちとけんかしてしまったというときに、先生方は上手に関わっていらっしゃるのです。その力と今回先生方に求められている力は同じだと思って欲しいのです。ボランティアの方々についても同じことが言えるかもしれません。

ただし、日常のストレスと違いトラウマという状態になると、何をターゲットとして介入するのかという点と安全性の2点に課題が出てきます。それが、医療の領域であるのか心理臨床の領域であるのかは別として、その2点が教育との境界になるのではないかと思います。



その安全性について補足ですが、先生方も、ボランティアの方も、人のためになりたっていると思っていられる。カウンセラーも基本的な態度は同じなのですが、巻き込まれないように安全に引き下がることを考えている点で大きく違うと思うのです。そのカウンセラーは自分たちでは多くのトレーニングを積み、自らを守る術を知っているつもりでいますが、今回の対応の中では体調を崩す者も少なくありません。今の状態は尋常な状態ではないのです。支援者側の心とからだの安全確保も極めて重要なことなのです。ボランティア活動参加者には、事前指導をして心の準備をさせることが必須です。同時に、やはり専門的な点検も必要です。例えば、先ほどの話にあった帰りのバスの中で振り返りをするとはとても有効な方法です。ただし、その限界も知らなければなりません。参加者が受けたショックが中程度までであれば有効なこの方法も、重い衝撃を受けた場合にはしてはいけません。直後に言語化するという方法は、阪神淡路大震災の時には多く試みられた方法ですが、あまり予後がよくありません。今回の大震災の中ではこのような方法はとらないことが決まっています。このように考えると、バスの中で、語らせていいのか、悪いのかという判断をする専門家の同乗が必要になるのかもしれない。また安全が確保できないのであれば、たとえ善意のボランティアであっても行かせないという判断も必要なのかもしれない。

井上先生：ありがとうございます。今の考え方は、教師が子どもに、不用意な質問をしたりして、思い出させたり、再体験をさせたり、そういうことが有効だと思われていたものです。間違えた使い方をしてはならないというところですね。個人の判断だけでは、非常に微妙なところだと思います。

もう一点聞かせてください。例えば、いろ

いろ子どものお話を聞かせてもらっていて、教師が耐えられないような場面に出くわしたら、その教師は、どうしたら良いのでしょうか。

例えば、「私のお姉ちゃんは、死んでしまったけど、私は生きていていいのですか。」というような質問は、答えられないですね。どうしたら、よいのでしょうか。

山本先生：私たちの職業は、ふつうなら答えられないような話を伺うことが仕事です。答えられないことであっても、この方にとってはそれをいま、ここで話すことが必要なのだと理解しています。今のことについては、先生方はその時に何もできないのではなくて、一緒にいることができるのだと考えて欲しいのです。その子どもにとっては、その話を先生にできるという状況がとても大切なことなのです。ただし、このような経験をされた先生は、その日はそのまま帰らないで欲しいと思います。例えば、その日学校にカウンセラーがいるのであればカウンセラーでもいいですし、いなければ同僚でもかまいませんので、「今日はこういう経験をしたんだ」ということを、話して帰ることが重要になってくるのではないかと思います。子どもは先生に重い荷物を持たせたのです。その荷物をカウンセラーや同僚と話をすることで、降ろしてから帰宅して欲しいと思うのです。

井上先生：ありがとうございます。記録して、引き継いでいくことが大切だというお話でした。時間があまりなくなってしまったんですが、藤岡先生、追加したいことをご自由にしゃべっていただけますか。

藤岡先生：追加したいことというのは、難しい話だなと思ったのですが、せっかくなので、復興教育に関わる取り組みを学校さんがどういうふうに進めているかということを紹介した

いなと思います。実は今回のプログラムの中に、実践例として、山田町立大沢小学校さんの例があります。4、5年生の社会科と総合的な学習の時間を使いながら、作った单元のようなのですが、これは、もう実際に実践済みのものなんです。何がすごいなと思ったかというと、自分たちに関わってもらったということからスタートとしながら、将来の提案までもっていくという構想をなさっているということです。大変な状況になったということ、どういうふうに自分たちが、乗り越えてこれたのか。自分自身も乗り越えてきたと思うんですけども、先ほどボランティアの話もあったように、支えられてもらったんだということ、見つめながら、さらに、このバリアフリーを考えようということで、もう少し、広がりのあるものにもっていく、葛巻に学ぼうというのは、まさにエネルギーの問題、そして、自分たちの街づくり、大人が進めている街づくりを、子どもレベルで考えようということは、すごく大事なことだと思っています。そういうようなことをやらせたいなというふうに、思うんですね。そうやって、将来像をしっかりと考えることが、じゃあ、自分は今何をしなければいけないだろうという部分につながっていくと思うんですね。それこそ、私は、主体性ということに、つながっていくんじゃないかと思っています。こういうような考え方をもちながら、先生方と子どもたちと接して、学びを作っていけばいいなと思います。

もう一つは、学校としてどう進めていくかということで、同じ山田町の南小学校さんの学校経営にどういうふうに位置付けていこうかという考え方を示したのになります。お作りになっているということだけでもすごいんですけども、復興教育のせまり方は、いろいろありますよということがわかりただけだと思います。例えば、津波被害の大きかったところは、防災や心のサポートに関わ

るところを、メインに置くということは、当然のことだと私は思っております。ボランティア的なものは、特に内陸のほうで取り上げていく。それが最終的には、すべて回って、すべてのものが関わっていくということが望ましいなと思うのですが、山田南小学校さんではやはり、心のサポートということはある程度メインに置きながら、どういう研修を組んでいったらいいのか、また子どもたちとどういうふうに接していくのか、自己肯定感を持たせるには、どうすればいいのかっていうようなことを組み込みながら、さらに、こういう年間計画の中に、位置づけていくわけですね。防災訓練を4つの月でやりますよとか、スポーツフェスティバルを取り入れながら、心のきずなを深めていこうとか、道徳の中で、生命の尊重を確かめていきましょうとか、あとは、行事や伝統芸能をうまく使う、そういうふうなことをまさにマネジメントしていくということ、学校のリーダーが進めていく。それを受けながら、先生方は安心して、自信をもって、教育活動を進めていくというふうになってくると組織的にしてくるのかなというふうに思ったりもします。

このようなことを含めて、先ほどボランティアの話も出ているわけなのですが、今回、県内の状況を見ますと、実際にボランティア活動に入っているのは、高校生が多いんですね。そういう子どもたちがどういう思いをして、返ってきたのかというのは十分学校さんでも支えてあげなければいけないというのは、今の議論を振り返って思うことです。中学生がボランティアにどう関わったかという、軽米中学校さんが、キャリア教育の一環として、復興教育を行ってボランティア教育との関連を図っております。どういうやり方をしたかという、野田村をどうサポートできるかということ考えたんですね。それを考える中で、こういうことしよう、ああいこうことしようということを、自分たちなりに

組み立てていくんですが、その時先生方が投げかけたのは、君らもボランティアに支えてもらったことあるでしょと。覚えてらっしゃいますでしょうか、何年か前に、軽米の川が大氾濫して、大変な被害にあったことがありました。その時に気持ちを持っていくというやり方をとっているんです。今回、実際にボランティアに入れたのは、生徒会のリーダー層だったそうなのですが、それ以外の子どもたちも、後方支援的な形で、中学生なりに関わっているというやり方をしています。小学校のほうは、先ほどの大沢小学校さんの例にあったように、自分たちを支えてくれるボランティアってどうだったんだろうというような形で、みつめていく。発達段階に応じながら、プログラムを考えていくというのが、大事なのだということを、ボランティアひとつとっても感じているところです。これがすべてだということがない状態なので、いろんなことを、大人も子どもも考えていくことが、これから数年間のことなんじゃないかなと思っています。

井上先生：ありがとうございます。藤岡先生に質問等ございますか。どうぞ。

質問者④：盛岡で小学校の教諭をしているものです。先ほど山本先生の方から、内陸の私たちも被災者であるという話を聞いて、ちょっと安心したところがあります。というのは、去年の3月から盛岡の学校にいるものとして、直接何か壊れたというものはないんですけれども、3月から、一日も休まないで今日まできているなというのが今日までの感想です。何があったとか、はっきり一つ一つはないんですけれども、何かこう引きずりながら、来ているというところです。

例えば、今の現状でいうと、人的にも物的にも、何か改善していきたいって言った時に、必ず同じ答えが返ってきます。先ほども

お話があったんですが、予算がありませんという。そこで、終わってしまっています。一生懸命やっている先生はどうしているかというと、自分のポケットマネーで教材を買ったり、人的なところでいうと、本当なら、二人でやれば楽なところを、一人の教員が休みの日も、普段も遅くまで仕事をしているというのが、現状です。

今学校現場は、本当に大変なものを先生たちは抱えながら、体調を崩す人も多いですし、その中で、できることを今頑張っています。本校にも、3名、被災地から転入生がありましたけれども、本当にいろいろなことがあって、頑張っているというところをわかっていたきたいですし、もし可能であれば、予算的な面でも、ぜひ考えていただきたいなと思います。一昨日の岩手日報に、復興のために、新採用の教員を増やしたという私にとって、とてもうれしい記事だったんですが、ぜひ予算の面でも考えていただきたいなと思いました。

藤岡先生：内陸、沿岸問わずに、大変なご苦労をさせていただいてというのは、本当に我々も、耳にしたり目にしたりしながら、わかっているつもりで、必死になって、企画書、計画書を国に出して、予算も求めているところです。県の中でも、教育というのに、本当にお金をかけていかなければいけないんだということも、声を出しながら伝えているところですので、ご期待に添えない部分はあると思いますが、当初予算についても、できるだけ検討して動いていただきながら、学校さんに還元していけたらなとしているところですので、そうはいつでもなかなかいきわたらないのではと思われるかもしれませんが、努力は続けてまいりますので、どうぞよろしくお願いします。

井上先生：ありがとうございます。現場の先生は

内陸、沿岸に関わらず、自分自身をサポートしていかなければならないくらいの働きをしています。岩手の将来像をどういうふうに描いたらよいかというお話ができなかったのですが、スライドに出してみましたけれども、岩手の復興計画についてまとめた形です。再生エネルギーとか、それからコミュニティを守って、安全な社会を描く。西日本、東日本、お互いの地域と出会うことで、過疎、少子化、高齢化というような社会から抜け出せる方向性を県は示しています。地域雇用も、インフラのケア、社会生活のケアを行って、雇用が増していくだろうと、そして研究開発拠点も、水産とか、あるいは防災とかそういうふうなところで、国際的なセンターを作ろうというような話もあります。こういうことをわれわれはイメージしながら、子供たちに夢を語る教育活動をしていきたいなと思っております。パネラーの先生方、付け加えることはありますか。

土井先生：スライドを二枚紹介したいと思います。

今後の日本を考えるときの基本になるのではと考えております。1枚目は、今回の津波と貞観地震津波との比較です。貞観地震津波というのは、平安時代に発生した地震津波なんですけれども、今回の浸水域と貞観津波の浸水域では、だいたい同じ範囲が浸水したことを証明できるんです。このことから、今回の地震津波は、貞観地震津波と規模がほぼ同じで、似ていると考えられています。

お示ししたかったのは、2枚目です。まだ作業中で完成していない図なのですが、貞観地震の前後に何が起こったかを示しています。貞観地震の時、火山では地震前後で活発で、地震の前には富士山大噴火がありまして、その3年後に地震が来ているわけです。地震の後は鳥海山が噴火したり、新潟焼山、それから十和田火山が有史時代の最大規模の噴火を起こしています。一方、地震の方を見てみ

ますと、貞観地震の前後50年位が活動期だとわかります。この時期よりも前と後には地震がないんです。この時期には、貞観地震の後、相模トラフの地震、南海トラフの地震が起きています。マグニチュードは8.4くらいのものが起きているというわけです。何が言いたいかというと、今回の地震の余震が続いているということだけでなく、さらに関東の直下とか、南海トラフ側の大きな地震、津波も起こり得るかもしれないというようなものが、去年、起こってしまったと考えることです。東北の被災地が、別の新しい被災地を支えなければいけないような時が来るかもしれないということを理解していただきたいのです。このようなことが起こるかもしれないという意識を持つことが大事だと思います。

井上先生：ありがとうございます。これから強く防災について考えていく必要があるということでしたね。長時間にわたり、議論に参加していただき、大変ありがとうございました。これで締め切ります。今回のシンポジウムは、一方通行でなく議論することができたので、高め合うことができたかなと思います。今日の内容を、学校教育に生かしていただけたら幸いです。本当に長い間ありがとうございました。

司会：井上先生、4人のパネラーの先生方、本当にありがとうございました。以上を持ちまして、第二回教員研修会を終了いたします。